

てんかん治療ガイドライン 2010

日本神経学会 ● 監修

「てんかん治療ガイドライン」作成委員会 ● 編

東北大学院教授・運動機能再建学／東北大病院てんかん科 中里信和

抗てんかん薬を処方する医師ならば、誰もが本書を手にとって、せめて目次だけでも目を通していただきたい。

本書は日本神経学会が監修し、辻貞俊先生を中心とする委員会がまとめたガイドラインの力作である。てんかんの教科書として、医療関係者が最初に読むべき本といってよい。また患者さんやその家族にとっても決して難しすぎる本ではない。自分の診療に対して疑問や不安があるのなら、本書を読んで主治医に相談してみるのも一法である。

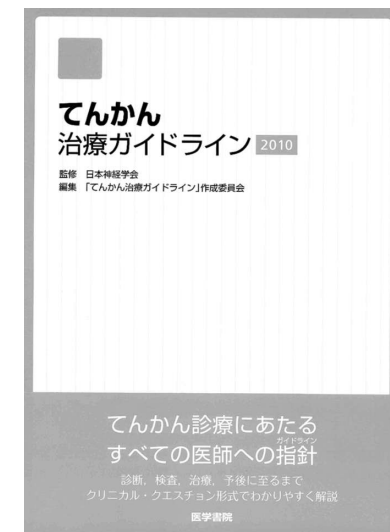
本書の構成は網羅的・系統的で、てんかんの診断・分類に始まり、検査、成人の薬物治療、小児の薬物治療、てんかん重積状態、てんかんの外科治療、妊娠に関係する話題、精神症状、日常生活に関するアドバイス、と続く。

各章はコンパクトで読みやすい。冒頭に1～2行にまとめられた「クリニカル・クエスチョン (CQ)」がおかれ、このCQに答える形で簡潔な「推奨」が続き、さらに詳しい「解説・

エビデンス」と、文献や参考資料、が記されている。読者には、まず「CQ」と「推奨」だけでも、ざっと流し読みしてもらいたい。1時間もかからないであろうこの過程で、読者はてんかん医療の骨格を理解することができる。

1例を挙げよう。CQ「てんかん重積状態で脳波モニターの必要性はあるか」に対して、推奨は「てんかん重積状態で脳波モニターは必要である (グレードB)」と続く。簡潔にして要を得ている、とはまさにこのことである。日本国内の診療体制をみるに、てんかん重積状態を疑う症例に対し、脳波モニターを実施できない施設がいかに多いことか！

日本では、てんかんを診療する医師の多くが、てんかん診療の非専門家といわれている。抗てんかん薬の処方量に着目すると、某社の推計結果は私の直感とよく似ていて、約2割が日本てんかん学会の会員、残り8割は非会員によるものらしい。いかにして本書を多くの医師に読んでもらうかが、今後の啓発活動におけ



る最重要課題ともいえる。

私はひそかに夢見ているのだが、例えば抗てんかん薬を販売する製薬会社が分担して、本書を必要部数買い上げておき、抗てんかん薬を処方する日本中の医師のすべてに配布してもらえないだろうか。あるいは、抗てんかん薬を処方する薬局にも配備してもらい、患者さんが自由に手にとって読めるようにしてもらってはどうか。

多くの医師や医療関係者が基本知識を持たずに安易に治療を開始・継続しているのは問題であり、その結果、普通の生活を送れるはずの患者さんが悩みをかかえたまま人生をあきらめている可能性がある。こうした問題を解決するうえでも、本書が日本全国、津々浦々に配布されることを願うのみである。

B 5, 頁 168, 2010 年

定価 5,250 円

(本体 5,000 円 + 税 5 %)

[ISBN978-4-260-01122-8]

医学書院刊